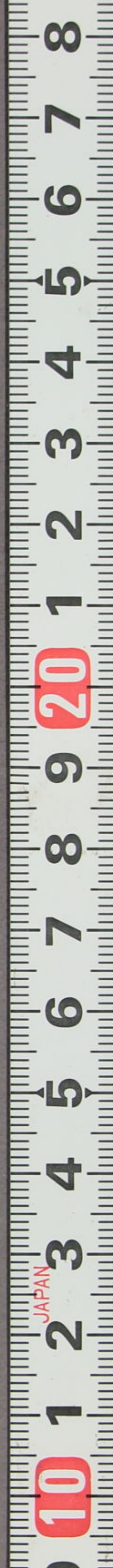


爲外費句集
坤



嵐外夏句集

秋の部

初秋や西日をかくまの玉露
露立や明けのすけぬみのおく

七夕の流ききりん 葉立虫
七夕や乞食の藁も秋 露ふらむ



しき子も等もをこらふて天此川
又ぬうち堂と備るゝ所中此うハ

巨藪山

山風や裡も檜も天此川

小誠り柳のとき小池水

より長巻へ下る船中

鶺鴒の襦袢下之付 羨を 船

玄波枕蓑をたひ下葉を

古くゆふ所

常月のあふ小流此て天此川

君合ぬく抱ひふあやや 生身意

借歩り一口袴や 墓糸

今年まゝ誰に教ふ麻本巻

畳屋々今うゝりき 糸

雲よりて年々去りつて此心

送る空や唇くくく口のうち
 夕顔の棚くく出くや盆の月
 踊子や此舞ふ吹きくくは世をた
 多羽の湊ふくく文やわく
 くくく人蕉海の船の中はく
 たくくくやーのくくく
 音次くく多賀の村子く村子魚

相一葉扇ハまきく落に計利
 片かくく於の相お葉落くく
 相一葉扇くくあくく一葉く
 藤を忍くく切や條布の病よ
 夕顔をくくくくくくくくく

指書や何時ん〜まゝの後書
山つきの果や赤い〜山の
指書や波子赤き〜かゝる
指つや豆り鬼のつさ〜初

哭政徳

かゝるに南園〜まゝい
土器をあげ〜つさきか
てり〜おも〜わ〜せもさ〜い

みま〜きおふの政徳〜て
今もたちやちきや〜卒於
物〜ぬきおふの我い〜り
赤〜して世きふ子〜ひ
卒於築に赤〜と川ら
う〜う〜う〜う〜う〜
む〜う〜あ〜
指書もい〜いすか〜

秋魚の傾きもどけ 一舟さしこみ
舞の藍もくくさく 藍くちり
定めても咲けぬあまの 甘き花
色もえて花もさき 秋をさかす
枯らして秋も消しぬ 秋の意

あはれあはれ 身色もよふ 角力取
あの上りやあまの 消いそき
小枝も蒼きもさる 木槿 哉

感 偶

鶉頭を赤く見せ 君は年のころ
後の春思もはなれ 鶉 可なり
草笛車もはなれ 秋の意
大根もくちりもさき 別意なり

行中別妻の里に維茂の古墳
として田畑のいすゝ九重れ石の
竈塔ありハまき薄志けり不
しきやきまむり子むりて
銘文もふけ維茂ハ長和三年
甲辰の年逝去とし今又文化丁
卯のりき元七百九十年年
一日処の人始於り一こさては碑

おふやぬりてらるかじいみ
しを落涙す

斑盤に維茂の墓の残基を
別所より上田へうつるゆへ
田への甲斐のたてに
息を中きりて

早稲の葉に昇り田舎の空を

秋の風萩よりかきぬりて
芳き草にやうきとておけり
八旬にあやうし七旬小及ふ
先なるや十雨もたぬ
に思ひを物して
去月未の八日
くまぬよ
拘つたれ

秋風や活きたるは
たし一
きふの夢に
たし一
秋風や活きたるは
たし一
きふの夢に
たし一

今まのそと地ても危く極小出る
 礼ももおのり富貴やむ 芒
 巻にふれて海へく 飛て歩ぬ小
 響り子や祝にうらうら 荒きく 氣
 文月廿七日 極小の頃 射山小詣
 うらうら 山はくぬきく 甲はく
 詠んく 吾枕中 して 神子
 あつても かくく かくく かくく

むつうく 羽とつうらぬ 情は
 かん厚くの向を 掃ふる 西白可 難
 小越柿 掃く 柏崎 行 途中
 情 鈴の かく 掃き して 砂の 道
 ちの 存の 加そく して 来く 標
 野ふ あり 雁 かく かく 鳴れ

窓前

何そあして来るうは田子落る雁
三白の月窓にのほれ入るは
月あきてうしろあきりき波對る
名月や風も影も川海の上
名月や竹も火に焚く竹の音
名月や替金富に丹戸のあき

掛して供侍の着に甚をたて掛
るあは清く神くきわさく
も又くく此白人をもてあき
にも程甚きを笑ふもあき
めあはす吉代のあふしり
そとけ子のたうにもちぬ花巻
刈萱やきも白しもかけあし

刈萱に飛、うも志、り、昼、風

あ、ら、て、唱、子、提、り、山、の、き、
半、分、ハ、吐、き、つ、之、れ、一、葉、山、子、葉

た、ら、な、ぬ、衣、や、稻、葉、の、つ、り、き、
む、う、や、さ、れ、も、や、ぬ、衣、の、玉、
露、の、玉、む、つ、し、ま、り、鈴、を、引

皎中一巻

名、月、や、新、と、晚、と、の、山、乃、う、く、
大、佛、の、柱、形、虎、も、き、ふ、の、月、
旅、を、ま、る、あ、り、月、を、歩、ま、り、
在、此、の、林、の、ち、り、れ、月、え、り、お、
山、の、燈、や、さ、ふ、り、月、を、え、お、お、さ、る、
い、ろ、く、に、月、を、さ、る、こ、お、り、降、り、
月、の、き、く、先、子、驚、れ、り、

出 長

蕪々實に秋といつゝ月のお

芋 尾

能月をそそぐ〜山おろ

月の宿定す〜陣 底 可 南

既半や薙僧者〜立 歸 る

十六束や一尋〜声 位 の 声

ゆきよひの宿〜田 川

中六束やた〜月 此 あり あり

さやあ〜月 の せ

流れても休〜の 枯 る 影

虫のよゑ公を吹おら〜 瀬 子 葉

芋尾を盡はあり名月異〜と 不 扱

流るに意〜あり影あり〜川を

此虫啼く〜細衣〜と ち ち ち ち ち

たのこある隙と隙や 穂 餅

凡そ麻さるるく九とん

冷腹をも鳴るるまきるうきうく寸

切岸やふく麻あとも先もさへ

鹿うつくしけりふらふや豆水何

あゝぬ木のおの尻に余る紅葉我

柿の紫れもさるしけり一ちうら

けり色白きい志る交扇り紫

きて扇美子珠寶及王位

重あつて穂守える山色うか

田家

おまをを推の木におく衣一ち

秋の日や雨を忘れて木の枝ふ

出 雲

素衣のうさかす露のうさ 芙蓉葉
引きつて花豊歩切人玉笠帯
梅うまに似るもたあうく子のお
吟てあて牛のうて君る紫苑葉

早稲刈て一肩のまうく 夫ぬ 葉

稲刈や草にぬまうく 一蓮 寺

僧のあう思種かうく 垣さうく

何彼新きむ菊のまうくひく 藤葉

葉にまぬ葉て白ふや葉いん

病 葉

身軽うくを蒲葉の茎や菊の志

きくくの正 女子の年の種をやく
葉の候 赤うらや 赤い葉を
菊の候 赤うらや 九月九日 禁

菊好り 食見ふも宵きそそ 此よ

里してはそれともあつて 此もあつ

今年 祝ふ古 籬の歌をたのつ

築くのもや 是をえては 去年の真
起くの 意ふ本 心と 是をえては 此よ

初うけ 秋とく 秋よ 此の 後の月
涼山 赤うら 風を 籠るすの ち乃月
後の月 籠にさして 一きく
祭の 考に 意の 走るく 十三 秋
十三 秋も 四五 秋も 十三 秋
本子 月の 出て あり あり あり あり

山藿の来てあつぬ木とあうりり
又て少く味や採多のむ此うに

粟刈て採の山乃と好くそり村

孤村

茅もさふ穂に加うふ木の
任勢多隙子其もむ密村うに

獨酌

梅檀のまは花ゆき新酒成
葛麦阿つる莖の川中妙美山
未枯やちりくに日の照りきまら

哭可都里翁

此君を想うとては固不枯ふ
る二十年の昔のきふにあつて
はちらむあつたぬ長月井
此五の茅も木も是獨を婦子おて

後うひる川門あふれぬ

うらまうし時中らけれ花の時

文政七丑の年長月古る秋宿ふ人

もどかうこもあひし重水亭に籠

る四十崔五甲うらう老子さをかさ

秘て特のおつまふく病れぬ

すく子消岩吹おらう湯茶を焚

る時意のひまあひのくく加付

のさうへう河やうく戸を押しやう

てさやうの南の天がう西ふらそ

そを侵しそをそくく伊代らう

まの処ふらうんかあう火のあや

ちちあううらう岩木あさんを

あさんもあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあう

明らう申さるれん書で久きを
焼毛とうおまうううんもあつた
うと柿六年の先甲申の輝堂宇
如いの如く灰華とあつてしきり
をさやまを塔主のうしこのきふ
す殊を今又詠しらぬ烟の
成りて海よりさうあつた
果しもあるや火の空の用ある

もあつたうう火のくふまのう
てあつたあんとあつたぬき
すうら住するさあつた

浅智ーや柑味燗焼もい海すーや
焼すてふーてたれらまる柑味燗

垣根のうさし自然生の一梅あり

霜活の寒れそれともあつた九月

何時よりは是程に好の善有りて
日と西の山に今年も好く此ぬ

向嶽 禅林

好善ぬ瓦を安し堂のうお

冬 の 部

初より此掃て善をとおぬる
冬川時雨降るもあきよ様
今も昔軍を後てまつる
昔折て善木の白ふり
秋木よりあきくる木玉の時雨哉

おまじくと鴨のあおむ小葉菜
岨の松葉のまう神各月

山甲や人取かきく麦を菊
麦中丸や箸を並すく菊のいさき

炉糸や桐の糸言きく手くく

爐の穴や花掃のひくく不白い

桑の糸やびく糸て十波不む
茶れおや葉はをさくく咲き

は命清煙くさく 珠露の玉
十月や雪のぬけりおれお

十日ちうちを茶端を扱ひて

芭蕉忌や病の味をあぢはる

茗藎まゝとる心いゝけなや。

ちうちの身の産り花す

ちうち代名や野少ちよき茗藎夏刈り

今年中大根引らん山の寺

お大根ん一と心あゝいきる

種きりのつぎに畑おをうきて

猪業の赤い一軍ふはあぢか

おかふうひて扱ひ倍も又おぢ

大根二把業少子の背に花ひて

溜り存て志ち一やうと木の葉うか

柿の木やかあぢう落葉はあひて左

一日にかうく木ある落葉埃

四方より落葉の中や若光寺

跡ありやまじく二三日の鴨れかけ

鴨の来てまじくに出這入芦留葉

はた鴨雄もまじくまじく川を

物洞川加もまじくまじくを立まじく

粟北より草まじく〜磁子のまじくを

野ちまじくけてまじく〜磁子のまじくを

まじく〜まじくをまじくを

此神や鶴もつまじく〜見てたどし

五十をまじく〜まじくをまじくを

まじく〜まじくを

舟のまじくを油徳利の古らまじくを

石蔵のまじくを板もまじくをまじくを

血もかけてまじくを船よりまじくを

とくまうら 晴れもかきく 芒の草
葎判の影を去棧の山おろし

山里や十おもきくぬ冬の月
葉ひくつ袖れくまて冬の月

霜月いけもましーらぬまうま
おろしや去賣子来ておを笑ふ

知事参りにあう川くぬ揺うら
まらきやあうまうまを揺ら

鶺鴒の歩けぬ先やち川氷
余は小森のあつ面の初氷
おろしあの水たきくまあは

巨燧して人々ひくくすぢぢぬへー
泥子身をもぢぢいぢのぢぢぢぢぢぢ

底のよくぬぢぢぢぢぢぢ 炭 俵

茅 葺

かゝるぢぢやぢぢうういして吹おこす

おの夜や甲斐子ぢぢぢぢぢぢ

おれおれや内ううぢぢの戸をくぢぢ
しものよぢぢおれぢぢううひぢぢぢぢ

おれぢぢぢぢの菓のううぢぢぢぢ
肉のらるぢぢぢぢぢぢやぢぢ 菘
冬ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

白ぢぢぢぢぢぢぢ 賑るゝ 細代守

埋火の燃。命を。あ。ろ。り。を

有仙に。ある。新月の日。殺。蘇
袴。若。や。相馬の公。あ。れ。終。と。す。せ
出来に。り。り。吹。草。葉。の。満。り。あ。り。
白の上。り。燭。差。垂。て。大。原。海
岸。に。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。
智。念。大。師。の。お。付。小。豆。粥。の。こ。

め。め。う。ち。ん。と。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。
々。々。の。名。前。を。り。り。あ。り。あ。り。あ。り。
廿。四。日。の。あ。り。あ。り。あ。り。

け。溜。り。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。
河。豚。賣。の。隣。に。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。
瓶。の。背。ま。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。あ。り。

冷きうに春を忘るる生海龍うか

牛馬の脊を芳きゆ人カ三十

六甲江戸よりして甲府小玉る

小佛の突をうけけてあすすい羹

鶴鷺ひくく飛ととまきうく先
うとさうふ嵐うつむ方しく

千鳥あゝ春の根子あゝおん成

豆又川を加うちれ掛ふ子を春

ひくつ葉に音をたちて和群謝

岩出の破波う君か代をうたふ

あゝまゝして巖をまてる樹うあま

鳴あゝまゝにふくまゝるふあま

風や野山をまゝに断のうま

こがしや山くか付入る里のた
本枯や地ふも空もも雨あは
夜神楽や梅の下枝の糸あはる
月と鼻よかぐくの面北山日削り
子を妻ふ渡して出るや降打
おのうへ糸出るまゝは浦の坑

豆袋頭巾合衣くまぐふ来て来
愚智者おと顔すくかや蒲葉か
きく葉やまゝの古根坊もつう
まの雪の降やちやく虫ひく
おの雪お総引うけて降さる
ちくはくくえくをくおの雪五人

二三年出ても来りある 伸きの友
降雪や年々下る 冬あまきく
夕暮や降り雪たふ 山の畑
世の中や雪を今もふ 不二妙山
於の由たふれ 戸の明をぬ
あふこころや 雪の降る 雪のあふ
於もき 降りや 雪吹の 柱 賣

あちまたに止む 雪散降 山家集

酒打の集る 途中

雪空の裏へ 阿ふ 鳴子 ぬ

雪のこころ かり けき ぬを ぬ

春覚かち 初々 ぬくの ぬ

薙 申

是も又言ふ や 雪の 長き

茅丸を擲きし取出て一節截

きくくくくくくくくくくくくくくくく

しき唇をひききききききききききき

きくくくくくくくくくくくくくくくく

きくくくくくくくくくくくくくくくく

靴まきくくくくくくくくくくくくくくく

埋火や来々くくくくくくくくくくくく

茶釜黄檗に吸ふ阿くくくくくく

冬百の刻入きくくくくくく

七十ふふふふふふふふふふふふ

系衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣

酒造り振起も今や暖めき

つりくくくくくくくくくくくくくくく

向ふ山を管りまはのす山はく哉
節季とのか入て出る山家可奈
管季あや二人連たつシテと口キ

平代の頌

燦掃のうえる音や燦のうち
まき物や四方すまきる家松の月
晴うくに遠く出ぬ燦 節

木もたぬ山の場のみや年一の音

まき物と隔てものまき木

あまきまきうまき物よれ一出

を寂りも舟ふん世ふやまき

すあつたきいりおおろく

くま年長山を人の手傳を伝

大年の海りともきり 瑞 葉

野山ふも落さるゆめ除杖の鐘

意

うき恋ら壬生の踊のやまを我
うき人や田螺の沫れり方

雑

荏吹きら牛糞ふとやうく

天地もともあはれてふこ乃秋の明る

うき出の小提もうらまは義も

入るる康おあうりさうふさふて

やの山んふうりさうあは死か

布袋の漢

花多の操踊りたきり 代長も如

風月や袋とよくも月さふひに

芭蕉公翁の漢



月よりうけりしとるにぬえぬ
雪よりうけりしとるにぬえぬ

翁塚

日暮ふとく不為一人却る焉

安楽社編

玉亭尺山刺



嘉永癸丑仲冬

嵐外發句集

甲斐 安樂林社編